

1. 「人生の目的は余暇」という西洋の価値観

このテーマを選んだ理由は、前回は休暇の話だったということと、私がバカンスの会社に 23 年いたからです。今日は、余暇、有閑階級の旅、リゾート滞在、バカンスの誕生、バカンスと旅についてお話をさせていただきます。

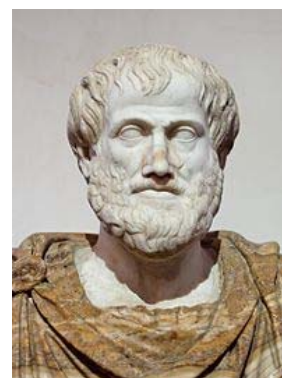
“余暇”、英語では“Leisure”といいますが、余暇とは何かという定義の一つは、「仕事から解放され、自分の自由になる時間」ということです。1 日 24 時間のうち、通勤時間や仕事時間、食事、睡眠、入浴といった時間を差し引いた時間といわれています。しかし、余暇という字が“余った暇”と書くものですから、どうでもいいもの、といったイメージがあります。広辞苑では「自分の自由に使える余った時間」と、やはり「余った時間」と書いてあります。新英和辞典では、やはり余った時間といったことが書いてありますが、「仕事からの解放」とも書いてありました。しかし、他のプチロベールやフランス語の辞書を見ると、もう少しプロアクティブというか、余ったものというよりは、自ら行動的にする、というイメージがあります。

元々、西洋人と日本人では、余暇と労働に対する価値観の違いがあります。西洋人、つまりヨーロッパ人、ただし同じヨーロッパ人でもイギリス人等アングロサクソンを中心とするプロテスタントは少し違いますが、西洋人はレジャー重視で、人生の目的は余暇であると考えます。余暇は Leisure であり、Leisure は善である。労働 (Work) は生きるための手段であるから悪だ、という価値観が根底にあります。日本人の場合は逆で、レジャーは軽視し、労働を重視します。仕事のあとの余った暇が余暇なので、余りもの、小人閑居にして不善をなすという言葉があるように、暇にしておくてろくなことはないというというような考えもあります。私の小学校には二宮金次郎の銅像が立っていましたが、手本は二宮金次郎、勤勉がいいという考えがあります。一方、西洋人は、「人生は余暇にある」「Leisure にある」という感覚をもっています。ご存知のように、古代ギリシャでは労働は奴隷がやっていました。奪ってきた捕虜だとか、何か悪いことをした人が奴隷ですから、そういう人が労働をする。従って、労働は不自由で卑しい仕事である。労働は生存のために必要に迫られてやるのだから、精神的ではなく、物質的で価値が低い活動である。それに比べて Leisure は真実を追求する哲学、美の追求、人々との交流、いろいろ話し合っ政治をしていくといった、人間的で価値が高い活動である、という考え方が根本にあったようです。ローマ時代になってもこの考え方が続き、特にカトリックの世界では、アダムとイブの話がありますが、労働は神から与えられた罰であると考えました。

そもそも学校を意味するスクールや、学者を意味するスカラーの語源はギリシャ語のスコレーで、「暇」という意味らしい。つまり Leisure です。スカラーは「暇人」で、学校は暇人が集まる場所、という定義になっています。

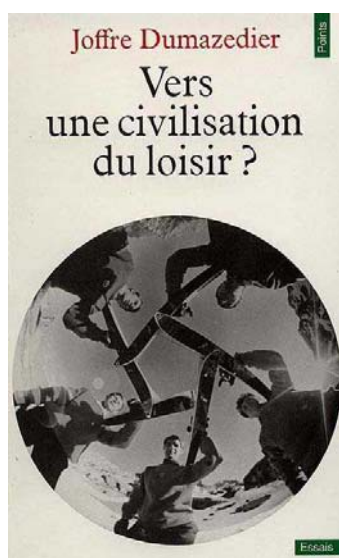
暇人がいい人生であって、労働はよくないんだ、思索をして哲学をするのがいいんだと。それでギリシャ・ローマの哲人は余暇を哲学に当て、それで良き人間になる。つまり、良き人間になるた

めに余暇があるんだと考えていたらしいのです。何か書いてあったのですが、ギリシャの哲学者のアリストテレスは、「幸福はスコレー(暇)に存する」と言ったそうです。要するに、暇は幸せであるということです。ただし、暇だからといってグタグタしている暇とは違って、もっとプロアクティブな暇をいいます。また、ローマ帝国の政治家で哲人だったセネカという人は「余暇について」という書物を記しています。



アリストテレス

フランスの社会学者ジョフレ・デュマズディエ(1915~2002)という人は、『余暇文明に向かって』という本の中で、余暇を定義しています。それによると、「レジャーとは、個人が職場や家庭、社会から課せられた義務



「余暇文明に向かって」
ジョフレ・デュマズディエ

から解放されたときに、休息あるいは気晴らし、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会的参加、自由な創造力を発揮するために、まったく随意に行う活動の総体である」としています。この中でのポイントは、“利得とは無関係”というところでは、儲かるからとか、これで偉くなるから、というのではなく、得はしない活動、得とは無関係な知識とか能力を養成するということです。要するに、レジャーの選択というのは生き方に関わるということです。

2. イギリスの有閑階級が観光革命を起こす

中世は余暇のことがあまり語られませんが、18世紀半ばぐらいから、新古典主義といって、フランス人たちの間に、自分たちのルーツはイタリアとかローマ地方にあるのだという考え方が生まれました。ポンペイの遺跡が発見されたということもあって、イタリアやギリシャとかを見て回る、旅行をして見てくるのが流行り始めました。また、イギリス貴族の間では、グランドツアー(教育旅行)も始まりました。貴族の子弟が1年、2年、当時は文化先進国として認識されていたフランスやイタリアを旅行して、ジェントルマンになるための教育を受ける旅です。また、温泉リゾートがバースに誕生し、ここが社交の場になっていきました。海水浴場がブライトンに誕生し、ビーチという概念が出てきました。アラン・コルバンというフランス人が『浜辺の誕生』という本を書いています。それまでは海というのは魔物が住んでいて引き込まれたりして怖いところ、人々が近づかないところでした。「空虚な恐怖」というような表現もされていました。それが楽しみ

の場が変わったのが、イギリスのブライトンが最初です。医者が海水療法は身体にいいと言ったのがきっかけとなったと言われて



「グランドツアー」／岡田温司
イギリスの支配階級や貴族の子弟たちが教育の最後の仕上げとして体験

います。これについては半分デタラメみたいなのところもあったらしいですが、いずれにせよ、それまで意味がなかった、むしろ怖い場所が、人々が集まる場所になったということです。ブライトンに海水浴場が誕生してからは、その他にもいろいろビーチができて、ビーチがひとつの意味を持ってきたということです。田園での夏の滞在もイギリス人が始めました。庭園を見るとわかりますが、イギリス式庭園は自然を大事にしたような造り方がされています。それに対してフランス庭園は、樹木を刈り込んで四角とか、シンメトリーにしたりします。英国式庭園に自分の趣味に合わせた豪華な家を建てて、夏にはそこで狩りをしたりスポーツをしたりして過ごす、ということをイギリス人が始めました。もちろん彼らは普通の人ではなく、貴族とか広大な土地を持っている有閑階級の人たちです。彼らは、10月から4月ぐらいまで南仏に滞在していたという話です。ビクトリア女王なども、その後の時代ですが、随分南仏に行っていたようです。ニースには、英国人によってつくられたプロムナードデザングレ（英国人の遊歩道）という遊歩道がありますが、プロムナードというのはそういうところから来ているのだと思います。イギリス人はスポーツ好きですから、スイスのサンモリッツでアルペンスキーを始めました。山も、それまでは怖いところで、人間を圧迫するようなところだったのですが、山は美しくして聖なる場所というふうになり、観光が始まることによって格上げされました。

面白いのは、18世紀のイギリスの貴族や土地所有者たちが観光革命をしていることです。彼らは、自由時間を持っているのは当たり前だ、我々は生まれがいいのだし、そういう特権を持っているのだという感覚を持っていました。彼らは不労所得生活者、フランス語ではランティエ(rentier)といいますが、もともと財産を持っていて働かないですむ不労所得者たちが、それまではバカンス、レジャーを楽しんでいたわけです。労働は奴隷がするもので、ろくでもないわけですから。私がバカンス会社にいたときに、イタリア人の上司に8年仕えたのですが、その人はシシリアンで男爵でした。彼は、自分の家は5世紀にわたって働いたことがない、自分の祖父から働き出したと言っていました。ロスチャイルド家の話を誰かがしたら、「あれは新しい家だ」というようなことを言っていました。確かにそういう人たちがずっといたわけですが、ところが、フランスの経済学者、ロベール・ボワイエ(1943～)や他の学者たちも言っていますが、産業革命などによって、工場を経営したり、貿易をしたりして財をなす新しい金持ち層が出てきました。そうすると、貴族などの有閑階級の人たちは「えっ、何だあいつら」という感じになるわけです。自分たちの社会的な立場がだんだん崩れていく危機感、いやだなと思う気持ちを抱くようになります。すると彼らは、「強制されない旅行」と言うのですが、自分たちが選んだ様々なリゾート地に長く滞在するようになります。そこは社交の場であって、彼らは多額の出費をするわけです。私は偉いんだ、私はセンスがいいんだ、私は選ばれているんだということを人に見せるために、彼らは消費をしました。安く行こうなどと考えるのは一般庶民で、こういう人たちは一切そういうことを考えずに、いかにシックか、いかにステキか、そのた



「浜辺の誕生」
アラン・コルバン

めに消費をする。ソースティン・ヴェブレン(1857 ~1929)という北欧系アメリカ人経済学者は、彼らのこの行動を「顕示的消費」と表現しています。ヴェブレンが言うには、彼らは、必要がないほどたくさんの召使を雇ってみたり、不必要に家を飾り立てたり、不必要に人をゴロゴロ連れて歩いたりする階級でした。ヴェブレンは、アメリカに渡ったノルウェー移民の子供で、大変苦勞した人です。その彼が『有閑階級の理論』という本の中で、「顕示的消費」という言葉を使っています。とにかく、有閑階級の人たちは非常に派手な動きをしました。それがパブリックスクールになり、パブリックスクールを出て一流大学に入り、旅でジェントルマンの仕上げをするという、私はあなたたちとは違うのよ、ということを示したわけです。フランスの作家のプーセントなどの本には、ブルジョアが出てきます。プーセントの本に出てくるブルジョアは、ちょっとスノビッシュな成り上がりというイメージがあります。私はあなたたちとは違うのよ、というふうな、きっとそういう感じなのでしょう。



「有閑階級の理論」
ソースティン・ヴェブレン

あるフランス人の学者は、コートダジュールのリゾート地の滞在客の何割が不労所得者か調査しています。人によっては、産業革命以降、ブルジョア階級が観光の世界に入ってきたと言うのですが、その学者によると、新興階級や商工業者は生まれだと言っています。コートダジュールなどのリゾート地に来ていた人は不労所得者、土地所有者がほとんどで、工場を経営しているとか、貿易業者は儲けることで忙しいので、それほどはいなかったと言っています。ヴェブレンは、エスタブリッシュメントであるために顕示的消費をしたと言っています。

イギリスにブライトンができてから、フランスでも最初にトゥルービル、次にドービルができてパリの有閑階級の人たちはノルマンディーの海水浴場に出掛けていくようになり、避暑地に社交界が移動してくるようになったのです。パリのある種スノッブな、セレブリティが集う、パリを小さくしたようなものがノルマンディーに移ってきます。レベルは違いますが、軽井沢にもそういうところがあります。そうすると、そこには豪華ホテルもあれば、カジノやコンサート、舞踏会、晩餐会、自転車競技、ゴルフ、テニスなどいろいろできるようになります。このリゾート地というのは、都市のあるスノビッシュな部分を小さくして移した感じのものです。顕示的消費はまだ続いて、ファッションも人に見せるため、人に見てもらうためということになり、ココ・シャネルはリゾート地に店を出しました。彼女はパリにももちろん店を出したのですが、最初にモードのブティックをリゾート地に出せばセグメントされた人たち、社交界の人々が集まっているのですから、非常に効率性が高い。これはなかなかいいマーケティングで、賢い人だったなという感じがします。

3. 20世紀以降、休暇としてのバカンスが生まれる

有産階級、不労所得のランティエの人ばかりがレジャーを楽しんでいたのですけれども、余暇、バカンスという感覚が出てくるのは20世紀以降です。働くからバカンスがあるのであって、働かなければバカンスは出てきません。毎日暇だと、特に暇という時間はないわけです。面白いのは、バカンスという言葉は Vacuum、Vacare というラテン語からきていて、「空虚」という意味です。それと、

フランス人は「バカンスを取る、Take the vacation」とは言いません。「バカンスに出かける」と言います。こういった使い方は、20 世紀以降です。元来は、法廷が休止する時期を指していたようです。要するに「中断している」というのがバカンスです。ですから法廷が止まっているとか、教育が中断しているとか、休息や通常の労働が中断しているとか、そういうときにバカンスと言っていたらしいです。それが休暇として使われるようになったのは 20 世紀以降だということです。

フランスでは、「バカンス制度」が 1936 年に法制化されました。人民戦線のレオン・ブルム内閣が2週間の有給休暇を義務化しました。この人はこの法律を通そうとしたのではなくて、偶然出てきたとも言われています。ただし、当時、フランス以外の国ですでにバカンスの制度ができていたところがあるらしい。フランス人は毎日 15 時間ぐらい労働して、休みは日曜日だけ。有給休暇という感覚は、労働者側にも雇い主側にもありませんでした。法律ができて、労働者側は、「突然こんなものをもらってどうするんだ」という感じでした。この法律ができる前までは休むとその分、賃金が引かれていました。ですから当初は有給休暇をもらっても、ゴロゴロしていたという話もあります。しかしその後、有給休暇制度はかなり早く浸透していき、自転車に乗ったり、車を引いたりして休暇に出かける人たちが出てきました。ブルジョアというか、クラスの高い人々が南仏でバカンスを過ごしているところに、ハンチングをかぶってジャンパーを着た人が押し寄せてきたため、眉をひそめるようなことがあったらしいです。とにかく、フランスの夏のシーンが変わってきて、大衆レベルにまでバカンスが広がっていきました。

1929 年に始まった大恐慌に対する政策として、アメリカの TVA、日本の満州進出、フランスのバカンス制定法とよくいわれますが、これは後付けではないかと思っています。有給休暇を与えることによって、労働者という大きなバカンスのマーケットが出てくることを狙っていたのかどうか、本当のところはよくわかりません。しかし、新しいビジネスが出てきたことは確かです。戦後、クラブメッドみたいなものができたり、キャンピングカーができて、ファッションや化粧品などもバカンスを意識したものが出てきました。例えばロレアルというフランスの化粧品の会社は、ブロンゼという日焼け用の化粧品を出しました。ファッション業界も、通常街で着るのとは違って、リゾート地で着るファッションはちょっと大胆で、カジュアルで、華やかなコレクションを必ず市場に出します。シャネルでもディオールでも毎年ファッションショーを 2 回行いますが、必ずクルーズ・ラインという、ちょっとくだけた感じのバカンス用の服を必ず出します。音楽業界も同様で、フランスのリゾート地で今年の夏はこの歌を流行らせよう、とします。昔、ユーミンの曲がスキー場で流行ったような感じです。このように、リゾートに関連する産業が次々と出てきました。

その後、2 週間だった有給休暇は 1956 年に 3 週間に伸び、1969 年に 4 週間になって、1982 年には 5 週間になりました。また、退職年齢も 65 歳から 60 歳に下げました。面白いのは、私が読んだフランス人の書いた本には、退職年齢を 65 から 60 に“引き上げた”と書いてありました。普通は“引き下げた”と思うのですが、彼らにとっては 60 歳で辞めたいから“引き上げた”という感じなのでしょう。私がいた会社も、パリ本社の定年はある時から 65 歳から 60 歳になりました。ただし、これにはワークシェアリング的な考えがあり、国民があまり長く勤めると、失業者が増えるから、ということのようです。ですからバカンスに関しても、あまりに長期にわたって休みを取ってはいけな

ということで、一回目の休暇は 24 労働日を越えてはいけなと決めたのだそうです。すなわち、5 週間続けて取ってはいけない。5 週目は離して取りなさいということです。1998 年には、当時の雇用相、マルティヌ・オブリ氏が、週 35 時間労働を決めました。労働時間を短くして、皆で少しずつ働きましょうというワークシェアリングです。これはオブリ法と言われ、アメリカなどからはフランス人も少しは効率ということを考えてほうがいと、さんざん馬鹿にされたのですけれど、フランスはこれで結構失業が減ったようです。

4. 今のフランス人にとってのバカンスとは

今のフランス人にとっては、バカンスはやはり人生の基本になっています。レゾン・デートル、単に休暇ではなく人生そのものだということです。バカンスは神聖にして冒すべからずという考えで、簡単に言うと、もう一つの人生なのです。11 ヶ月働いて、1 ヶ月別の人生を過ごす、という感じです。年間 5 週間の有給休暇がありますし、しかも最低 2 週間、最高 4 週間をまとめて取る権利があります。ここは日本と違うところです。その他に、イースターなどいろいろな休みがあります。だいたいは夏に 3 週間、冬に 1 週間、イースターに 1 週間休暇を取る人が多いです。ともかく、1 年は夏のバカンスを中心に回ります。日常生活から脱出して、本来の自分に戻るとのことです。家族、出会い、交流、祭りとか、人生はここにあるぞという感じです。フランスにいと、本当にそう思います。6 月ぐらいになると交通機関が空いてきて、7、8 月になると空っぽになり、9 月になるとまた混んでくるという感じです。ともかく 6 月になると、「バカンスはどこに行きますか」という話題だけ、帰ってくるると「バカンスはどこに行ったの」という話題だけ。今はわかりませんが、昔はそうでした。

レジャーに人生があるというのと同じで、バカンスに人生があるので、映画とか小説の背景にバカンスが多く登場します。エリック・ロメールという監督は昔からバカンスをバックにした映画をたくさん撮っています。日本のテレビドラマや映画は、会社もの、業界ものが多いですが、フランスではあまりそういうのは見かけません。業界、会社にいるときは本来の自分ではないわけで、会社を休んでバカンスにいるときが本当の自分なのですから、バカンスは、恋をしたり、友人や家族との時間を過ごしたり、新たな発見をしたり、いなれば人生を感じる日々ということです。バカンスは小説にも多く見られます。『悲しみよ こんにちは』というサガンの小説は、私が「こういうのをバカンスというんだ」、と最初に思った本です。「フーン、コートダジュールに別荘を借りて住んだ、お父さんは愛人を連れてくるんだ」、みたいな感じでした。そこで 17 歳の多感な頃の少女が大人を見て少し大人になるというか、人生を感じるのです。バカンスが背景で、そこで若い娘がいろいろなバカンス地ならでの体験を通し、人生を感じるという小説です。『シェリ』などを書いているフランスの女流作家シドニ・ガブリエル・コレットに『青い麦』という作品があります。これは若い男女の話で、これも舞台はバカンス地です。バカンスにいる



「悲しみよこんにちは」
フランソワーズ・サガン

ときが本来の自分だということです。

では、フランス人にとってバカンスはどういうことかという、その目的は先ほどデュマズディエが言った休養と気晴らしと自己開発であり、これがポイントです。要するに、休養、デタント、リラククスするということです。それから、太陽、家族との再会ということになります。勤め人でバカンスを取る人は 100%ですが、バカンスに出かける人は 7 割ぐらい。統計上、休暇は短期と長期に分かれていて、4 泊以上でないとバカンスではないのです。バカンスの取得は、一人平均 4.2 回、短期は 3.3 回、長期は 2.4 回で、要するに日本よりずっと休みを取る機会が多いということです。だいたい 9.6 泊、10 泊、2 週間ぐらいはバカンスに行っていることが多い。行き先は圧倒的に国内で、海外は少数派です。というのは、フランスにはバカンスに向いたところが彼方此方にあるからです。海外にバカンスに行くのはドイツ人です。ドイツ人は外国が大好きです。ドイツは寒く、あまりバカンスに向いていないですから。フランス人は、海、山、田舎(カンパーニュ)に恵まれています。湖は少ないですが、他所の都市にバカンスに行く人もいます。ただし、両親の家とか友人の家とかに滞在することが多く、ホテルに泊まる人は少ない。犬がいたらキャンピングカーとかを使います。自分の別荘もあります。私が以前勤めていた会社のフランス人の上司は、毎年バカンスには奥さんの実家や自分の実家に行っていました。

バカンスライフに求めるものは、まずは健全な肉体を取り戻すこと。身体を動かして嗅覚や聴覚など五感を蘇らせて、健全な肉体を取り戻します。それから、日常から時間的にも空間的にも離れて、もう一つの人生を生きる。リラククス、休息をする。休息にも精神の休息と肉体的な休息があります。あとは新しい出会い、他者とのコミュニケーションです。先ほど言いましたように、バカンスをしていると何か新しいことがあるわけです。『悲しみよ こんにちは』にしても『青い麦』にしても、何か新しいことや新しいコミュニケーションがあって、そこから人生が一步進む、といったことが起きる。新たな発見とか自己の向上というもことも求めています。

バカンスは一カ所滞在型なので、どちらかという日常生活から一時的に異なる場所に身を置く。家族単位で普通の生活をしているので、別に変ったことをするわけではなく、普通に朝起きて日常を過ごす。だからバカンスというのは非日常的な場所における日常生活なのです。私が以前勤めていたクラブメッドの創始者のシルベール・トリガノは、旅行はバカンスの概念の中の一部である、だからバカンスは旅を含む上位の概念だと言っていました。確かに、バカンスの中で旅に行く人もいるわけですから、そのとおりです。生活の場所を変えて、時間的にも空間的にも違うところに行って普通に暮らすというのがバカンスです。

一方、日本の休暇の場合は、どちらかという周遊型が中心だということと、休暇を取らない、細切れ型という特徴があると思います。バカンス、長期休暇は日本人には向かない、退屈でやりようがないじゃないかと言う人がいます。しかし、かつては日本人も湯治場で長く滞在していたわけですから、長くいられると思います。明治時代でも、湯治場に行って長く休暇を過ごしています。『明暗』という小説などでも結構長く滞在しています。あるいは経済活動に支障が出るという人もいますが、一人当たりの GDP は日本ではかなり低くて、イタリアと同じ、確か世界で 30 番目ぐらいです。ということは、一生懸命働いてもそうそう経済効率がいいわけでもない。フランス人は勤勉で

はない、日本人は勤勉だからと言いますが、日本人が勤勉かという、これも今や難しいところです。たぶん日本人というときに、戦後の日本、例えば生涯同じ会社に永年勤続するというイメージなのかもしれませんが、これは戦後の高度成長期の話でそれほど昔の話ではなかったわけですし、戦後すぐも長い休みを取っていましたから、今の状況が特殊なのかもしれません。これについては議論があるところだと思います。フランス人は勤勉ではないというのは難しいところで、デパートや郵便局などに行くとサービスが悪く、確かにフランス人は勤勉ではないなと思います。デパートは7時閉店だとすると、7時5分前には店じまいに入り、お願いしても商品を買ってくれないのですから。ところが、エグゼクティブは大変よく働きます。日本人の倍ぐらい働きます。そこはちょっと違う。

日本のバカンスと日本人をどう考えるか、皆様にご意見を伺いたいということで今日の私の話は終わりにしたいと思います。

【ディスカッション】

廻: 日本とヨーロッパでは歴史が違う。平安時代の貴族は働いていないが、江戸時代の侍は一応サラリーマンで、働いているといえど働いています。給料生活者で、暇だけお城に出たりする。しかし、西洋の貴族はそういうこともやってはいけないわけですから、その辺が日本と西洋では大きく違う。例えば日本には哲学はあったのでしょうか？ 哲学という言葉自体が明治時代に作られたのでは。

家田: 思想という意味では中国から入ったものがある。

廻: 思想はある、哲学は「する」のです。希哲学です。希むという字に哲学です。日本には根本的に奴隷がいたことがないし、それほどの有閑階級はそんなにいなかった。そういう歴史的な背景が違うのか、本質的に違うのか、よくわかりません。

家田: 後白河法皇とかの時代は、天皇も含めて熊野詣に、何回も行っています。彼らは完全な有閑階級だと思いますが、ただどこか1カ所にずっと滞在しているというよりは、ゆったりと回ってくる（回遊旅行？）のかと思っていましたが、どうなのでしょう。

廻: フランスのボワイユという学者は、毎回同じ通りを通っていくのは観光ではない、ツーリストではないと言っています。

安島: 定義の問題です。目的地は宗教的な場所であっても、途中での楽しみというのが当然出てくる。

廻:熊野詣では楽しかったのでしょうか。

家田:外国には離宮という宮殿があり、中国にも離宮がある。清王朝では承德というところが夏の避暑用の離宮です。あれもバカンスでしょうか？

廻:イギリス人が田舎にある自分の領地をチェックしに行くのではなく、強制されずに楽しみのために派手な家を建てて訪れる。あれを離宮といえバカンスですね。例えベルサイユ宮殿のプチリアノンとかは離宮です。

小松:日本の湯治はバカンスなののでしょうか？

廻:湯治には自分で味噌、醤油、お米を持って行き、長期滞在ではありますね。

小松:長期滞在ですね。日常で非日常の、遊びに行って日常生活をするというような。

家田:けれど、湯治という言葉からはリッチさを感じません。

安島:それは、今残っている秘湯のようなところで江戸時代からやっている旅館では、そうした感じがするかもしれません。例えば、加賀藩の殿様が湯治に行ったという古い温泉もありますし、途中で鷹狩りとかをしていた。全く病気ではないが、湯治に行っていた。

関川:鷹狩りして疲れるからゆっくり湯に浸かってという感じですね。

廻:湯治は、農民が農閑期に行くのがメインでした。

安島:武士は湯治願いを出せばいつでも行けたのです。

家田:農民はいつぐらいから湯治をやっていたのですか。

小松:江戸時代ぐらいからではないでしょうか。秀吉は、けっこう豪勢に湯治をしていた。

家田:それは、バカンスそのものですね。

安島:日本の各地の温泉場には、殿様が泊まった専用の別荘が結構あります。

廻:そういう意味では、湯治はローマ時代からあります。みんな保養地、温泉というか鉱泉に行っ

ていた。ローマ人は食べては吐いて、といった生活で身体を悪くするから、そうすると湯治に行く。

安島:ローマ人の温泉は、熱いのに入ると、ローマ風呂、蒸気湯に入ったりするのがある。家庭では多分蒸気風呂は持てなかったと思うので、共同のお風呂を作ったのではないのでしょうか。自分の家でやるにはあまりにも大袈裟すぎますから。

廻:ローマ時代の一時期、すでに保養所の温泉にはカジノ等、いろいろなエンターテインメントがあって、リゾート地みたいになっていたようです。湯治だけでなく、楽しいことがいっぱいあった。毎日どうやって暇をつぶすか、という人々が集まる場だから。

安島:ローマ人は、進駐したところ、バーデンバーデンやバースに温泉を作りました。面白いのは、ローマ人は結構遠くの温泉に湯治旅行、温泉旅行に行っていたようです。それがどうしてわかるかという、ローマから発掘されるものの中に、温泉を飲む飲泉のためのカップが出てきて、遠くの地名が書いてある。つまり、自分を買ってきたのか誰かにあげたかわからないのですが、旅行記念のお土産が発掘されたことから、相当遠くまで行っていたようです。

梅川:遠いというのはドイツとかそのくらいですか。それとももっと遠くですか？

安島:確かトルコのほうだったと思いますので、1000 キロ以上だと思います。

家田:ハンガリーあたりにも結構温泉があります。さて、湯治が日本のひとつのバカンスのスタイルだとすると、宗教系の活動で長期にわたって滞在するというのは日本にはあったのでしょうか？例えば、八十八箇所廻りは移動を続けるのでバカンスではない。動くのではなくて、滞在する、というのはあるのでしょうか。

廻:あまり聞かないですね。湯治は、ある殿様が行った温泉地に他の殿様も来て一緒に滞在する、ということはなかったでしょう。しかしヨーロッパのリゾートは社交場だから、そこが湯治とは違うのです。リゾートは、ただ休むだけの場所ではなく、社交をする。

安島:社交という意味では、たぶん東京の上屋敷、中屋敷、下屋敷も別荘的な感じだと思います。加賀の殿様は今の東大側のところが上屋敷、中屋敷は巢鴨、駒込、下屋敷は板橋にありました。だから中屋敷、下屋敷はどちらかという別荘。明暦の大火で上屋敷が全部焼けたので、また焼けると困るからと中屋敷、下屋敷を作っておいて、普段はそちらに能とか鷹狩りとかに行っていた。おそらく、いろいろな人を呼んでいたのでは。

廻:お能などは、人を呼んでいますね。でも規模が小さい。ヨーロッパ人と日本人は、ソーシャルラ

イフの感覚が少し違うような気がします。日本でも、人々が集まったり交流したりしたのですが、社交とは少し違う。

十代田: 明治になって元勲たちが大磯で会談したとか、ああいうほうが西洋的です。

廻: そういう意味では、日本で最初の社交の場となったリゾートといたら、やはり軽井沢ですね。

小松: 今でもやっています。軽井沢会というのがあり、夏休みのある一日、万平ホテルに別荘族、軽井沢会に入っている人たちが一斉に集まってパーティをやるのです。

廻: そこで会う、そこでの世界というのがある。

安島: リゾートの機能はそれだと思います。リゾートの重要な機能は、交流。

家田: ある種クライテリアがあって、この辺の階層の人々が集まるソサイアティがあって、そこで情報交換をしたり、お互いに、「ああ、うちは偉いね」というのを見せつけあったりする。先ほどの廻さんのお話にあった「見せつける」というのも、違う階層に対して見せつけるというよりは、自分たちの中での再確認みたいな感じになっているのですよ、きっと。

廻: しかし日本人は、わりと見せつけないのではないのでしょうか。私がかつて外人の上司に言われたのは、日本人はなんで見せつけないのだと。

安島: 謙虚が美德ですから。

廻: 例えば、堤清二さんがサーブに乗っていたら、「考えられない、なんで彼がサーブに乗っているの」と元上司は言うわけです。彼の地位だったら、もっとすごい車に乗っているのではないか、と思うわけです。中央公論の社長が国産車に乗っているというのは、西洋人からすると信じられないわけです。西洋人は金持ちになれば、私は金持ちだと、見せるのです。

安島: 先ほどの社交の話に戻りますが、明治になってから軽井沢ではどちらかというと洋式の社交をした。そこは箱根とは全然違う。箱根は、それぞれの別荘の中にお茶室とかがあり、そこに人を招いてお茶会とかをやっていた。ですから、公共の場、ホテルとかにみんなが集まって交流していたのではなく、それぞれの別荘に招いて茶会をやっていた。そういう有名な茶会だけが全部書いてある記録がある。つまり、日本と西洋、あるいは日本の各地によって社交や交流の形が違うだけだと思います。

廻:日本では、家に食事に招いたり家に呼ばれたりすることがあまりありません。要するにアフターファイブにおいては、家が最初のレジャーの空間で、次にウィークエンドがあって、次にバカンスがあるという、こういう流れだと思うのですが、それが日本にはない。

家田:日本は、会社が楽しいし、仕事が楽しい。仕事が面白くてしょうがないという人ばかり。

廻:みんな会社が好きだから、会社がサロンなのでしょうか。

小松:例えば、軽井沢銀座というのがあって、別荘の人が東京でお付き合いしているお店を連れて来たのです。私たちは夏の間はこっち(軽井沢)にいるから来なさいと。そうしたお店、つまりハイクラスのブランドのお店の集合体で軽井沢銀座は有名になったのです。今でもそういう方がいらっしやるのですが、そういう方はお手伝いさんも一緒に1ヶ月ぐらい連れてくる。軽井沢銀座で買物して、お客様をお招きしたりする。ところが、だんだん合理的になってきて、お手伝いさんを連れて来なくなると、奥さんがゲストのお世話をしなければならず、それは奥さん達はいやがるのです。それで家にお招きするのはお茶までで、お泊りはホテルへ、お食事もホテルでしようということになる。だから家には今でも呼びますが、お茶とケーキまで。

家田:廻先生に質問ですが、宗教改革の後、ドイツとかオランダとか、新教系のところは少し違うのでしょうか。フランス人がバカンスを取るのと同じようにドイツ人は旅行が好きですが、バカンスとは違う考え方が新教に出てきたということでしょうか？

廻:私も詳しくはわかりませんが、ピューリタンの人たちはよく働きます。だからアメリカ人もフランス人ほど休みは取らないし、とつても1週間程度です。フランス人と新教徒との感覚は全然違います。

家田:イギリスも新教ですが、今日お話しされたグランド・ツアーは、貴族階級の中で、うちは新教だけどフランスやイタリアに憧れているという意識の中で生まれたのでしょうか。

廻:私がバカンスの会社にいたときに、プロテスタント系の人、アメリカ人とかイギリス人は、メインである地中海系、ラテン系の人々とは少し違いました。私は会社に入る前まではアメリカとヨーロッパの区別もろくについてなかったし、西洋はどこも同じだと思っていましたが、こんなに違うのかという感じがしました。ですから、アメリカマーケットをヨーロッパと同じだと思ってビジネスをやると大間違い。ヨーロッパも国ごとに違う。

十代田:ドイツ人を見ていると、健康のためのバカンスという感じがします。

安島: イギリスは、シーサイドリゾートは元々は健康から始まりましたが、だんだん娯楽化して、それがコートダジュールに行ったのだと思います。シーサイドリゾートの原型はやはりブライトンでしょう。ロイヤルパビリオンというのがブライトンにあります。それは皇太子が贅沢三昧して建てた中近東風のデザインの離宮です。皇太子の取り巻きの集まってきて、それでリゾート都市になるわけです。そこに岩倉使節団が行ってそれを見て、大磯ができたのです。

家田: 日本では、御用邸があちこちにあります。その場所も海だったり山だったりします。

安島: 日本の源氏物語でも、貴族はいくつも別荘を持っていたようです。桂離宮、修学院離宮等。

廻: 平安時代と江戸時代の日本人は、今の日本人とは別人みたいに違います。

安島: シーサイドリゾートを発明したのはイギリス人。ブライトンは、ロンドンから 80 キロぐらい南に位置しますが、冬は天候が悪い。ですから、やはり気候のいいニースとかに行き、プロムナードザングレとかをイギリス人が作っているし、ニースだけでなく、カンヌ等、南仏周辺にもイギリス人が好んだ土地がある。

家田: イギリス人が始めた観光というと、イギリス人のカルチュラルなバックグラウンド、それから辺境としての引け目、大陸への憧れという背景と、もう一つは大陸に比べて一足先に産業化が進んで国力がつき、外貨のレートもずっとよくなる、いわばお金持ちになったから、という背景もあるのでしょうか。

廻: 私はそこまではよくわかりませんが、ボワイエという人の本によると、有産階級の人たちが産業革命で生まれた新しい勢力に対して、自分たちは違うところ見せるためにわざわざ旅行したと書いてある。旅行したりバカンスに行ったりして、私たちは違うのだ、成金ではないのだと。

家田: それで没落を一步早めたわけですね。

廻: 第一次大戦以降、有産階級がだめになったのです。

安島: グランド・ツアールートは、まずパリに行き、その後の一つのルートはマルセイユに出て船でニースやカンヌに行くというのと、リヨンのあたりからアルプスを越えてトリノ方面に出てニースあたりも通っていたのではないのでしょうか。つまり、グランド・ツアールの時代に、すでにカンヌやニースの辺りがいいということをイギリス人は知っていたのでは。

廻: あのあたりは暖かくていいところです。イギリスは寒いから、ビクトリア女王も半年も滞在したの

です。

安島:ドイツ人がたくさん旅をするのは、ドイツ国内に行くところがないからです。北はバルト海で寒い。夏でも寒いところしかないし、南のほうへ出るとしたらフランスを横切らないと行けない。アルプスに行くといっても、ドイツ国内にはアルプスの端っこしかない。

関川:ニュルンベルグの街中に、砂を公園にいっぱい集めたビーチリゾートというのがあって、街中にもビーチパラソルとかありました。

安島:気候から考えれば、ドイツはフランスよりも北に位置するから、冬の気候でうつうつとしたところだと思います。

廻:ドイツ人の海外旅行が多いのはわかります。ドイツは寒くて、そこにいてもしょうがない。

安島:みんなが海外に出かけるので、外貨がなくなるというので、国内の田舎で休暇を過ごす、クラインガルテンといった政策が進んでいるのがドイツです。

梅川:スポーツ施設の整備を進める「ゴールデンプラン」もドイツです。

安島:ドイツは、そういう政策は一番しっかりしている。だから日本の農水省とかが真似するのはドイツです。ドイツのグリーンツーリズムとか、国内でやっている取り組みはおもしろくないので、国際的な商品にはならない。

梅川:ドイツは温泉もそうです。温泉で国際的な商品になっているのはバーデンバーデンぐらいで、たいていは国内向けのいわゆる療養温泉地です。

小松:温泉はドイツだとクア、フランスだとセラピーではないですか。東洋ではスパという感じに変わっていますが。日本でも群馬県の草津とかはドイツの真似をしてクア施設をつくりましたが、あまりうまくいかないようです。

廻:クラブメッドというのは 1950 年にできたのです。リゾートは有閑階級の社交の場だったわけですが、有閑階級でない普通の人々が 2 週間程度、社交というかコミュニケーションを中心としたバカンスを過ごすというための施設なのです。バカンスが少し一般化したというか、本当はソーシャルツーリズムに近かったのです。

関川:クラブメッドは進んだ考え方ですね。

廻:最初はすごく進んでいたと思いますし、面白かったと思いますが、途中からだんだん普通になってきたのではないのでしょうか。

小松:社交場が残っているところというと、軽井沢の新軽ゴルフというのがあります。ここはゴルフのクラブが社交の場なのです。ゴルフの予約などありません。別荘のクラブの人たちが集まって話をして意見が合うと、じゃあ今から周ってみるかといって、仲間ができるゴルフコースへ出て行くのです。だから来てゴルフをしない人も結構いるのです。混んでいるときは会員の人たちしかプレイさせない時期があるからで、ビジターだけではプレイできない。会員の奥さんでも会員でなければプレイできない時期があるのです。完全にゴルフ場が社交場です。

鳩山:ハワイでも似たような日本人のゴルフコンペみたいのがあります。

廻:ゴルフ場は社交場ですね。

梅川:カントリークラブというのは、本来はそういう場所なのでしょう。

安島:軽井沢の価値を最初に見いだしたのは外国人なのです。ショーという宣教師で、築地の居留地に住んでいた。そこの仲間呼びかけて、夏は皆で軽井沢にやってきた。つまり、築地のコミュニティが夏の間、軽井沢に引越してきたのです。そのうち、それを見ていた日本人の上流階級がみんな軽井沢に別荘を作ったので、夏の間はそういう付き合いでみんな軽井沢に行った。だから昔は家族で夏休み中ずっと軽井沢に行っていたり、鎌倉と軽井沢と両方行くとかしていたので、日本人がバカンスに向いていないわけではない。

鳩山:うちは、今でも家で料理を出して社交会みたいなのをよくやってます。政治家の人たちばかりですが。リゾートのコミュニティは、同質性を求めるようなところがありますね。

廻:シャネルがリゾート地でお店を出したというお話をしましたが、あやしげな人たち、商売系の女性たちが出入りするようになると、だんだんイメージが下がってきたりするのです。また、リゾート地はパリや東京と比べると小さいので、いろいろなことが可能になる。例えば今の皇后陛下も軽井沢にいるときは自由にできたわけです。昔、皇太子妃のときは自由というわけではないけれど、今とは違ってもう少し自由だったので、美智子様は軽井沢が大好きだったのです。

私はかつて上司が外国人だったので、彼は家を社交場として使っていました。しょっちゅうパーティやディナーを仕事の一つとしてやっていたので、うんざりしていました。全部ケイタリングでしたが。

梅川:パーティやディナーをビジネスとして使うわけですか。

廻: そうです。コミュニケーションを円滑にするために、食事会はしょっちゅうやっていました。シッティングのときもあれば、パーティのときもある。

安島: 日本で働く外国人が、すごく家賃の高い、広いマンションに住んでいるのは、自宅でのパーティがビジネスだからです。

鳩山: 外交官は外国では広い家に住みますね、社交場として家が使われるから。

関川: 見せつけるため、ですね。

鳩山: 外国人のようなプレゼンスが、日本人にもやはり必要ですね。

安島: 私は昔、リゾートを舞台にした映画の研究をしたことがあります。その中で、「緑の光線」という映画を取り上げました。「緑の光線」というのは、パリに住む若い女性が5月か6月頃に、今年のバカンスどうするみたいなどころから始まって、そのバカンスの生活だけを描いた映画なのです。その映画は1986年の作品ですが、その前にもコートダジュールを舞台にして撮った映画はたくさんあるのです。ところが、最近はバカンスやリゾートを舞台にした映画がぱったりなくなった。フランス以外の国も、日本も。日本もスキー場を舞台にした映画は昔はたくさんあったのに、1987年の「私をスキーに連れてって」以来、ない。みんなが憧れた場所は、映画の舞台になる。

廻: 「海辺のポーリーヌ」も、「緑の光線」も、素敵なリゾート地の話ではないので、素敵なおところは出てこない。

安島: ですが、フランス人のバカンスの実態がすごくよくわかる。友達の家に行ってみてみんなで農家の庭みたいなどころでご飯を食べるたりするという実態がわかるのです。アメリカでも、昔はフロリダで撮られた映画がありましたが、最近はないようです。

安島: 韓国ドラマ「冬のソナタ」には、スキー場が出てくる。韓国人にとってスキー場は憧れだったのでしょ。今はわからないですが。

廻: 働いているときに舞台になりやすいか、休みのときに舞台になりやすいかということでは、日本の映画は働いているところが多い。

関川: それは共感しやすいからですね。

廻: きっとそうでしょう。日本人は働いているのが好きなので、業界ものとかが好きです。

関川:日本人は、全員休まず働いているような感じがある。有給休暇を消化しないのがむしろ美德で、消化しようとする、まわりが困惑する。

小松:給与の引き下げを伴わない労働時間の短縮というお話がありました。週休 2 日制が日本に定着するとき、働いている人たちの意識は変化していますよね。

廻:日本で週休 2 日になったとき、総労働時間を変えないで週休 2 日にしたところが結構多かったのです。例えばある企業は、土曜日の労働時間が 3 時間とか 4 時間だったので、他のウイークデーの日の朝の始業時間を早めて昼休みを短くして夜を長くしたのです。ところが昼休みを短くしてもみんなちゃんと昼休みを 1 時間取るし、朝もゆっくり出社するなど、なし崩しになったりしたのですが、とにかく、週休 2 日制導入当初は、1 週間の総労働時間はあまり変えなかったのです。

小松:当初は隔週で土曜休みからスタートして、しばらくして完全 2 日制になったところもある。週休 2 日になったらどこかに行かなければいけないのではないかといった意識も醸成されたような気がする。一生懸命仕事する、というシステムから、週休 2 日制という制度が出てきた瞬間に、何かをしなきゃいけない、そんな気になったのではないのでしょうか。

廻:ヨーロッパにいと、週末どうするのと必ず聞かれます。何もしたくないけれど、そう聞かれると、何かしなければいけないような気持ちになる。

十代田:月曜日になると必ず週末何してた、と聞かれますね。

廻:あれも結構ストレスです。

梅川:何と言えれば自慢できるのですか。

十代田:とりあえず、どこかに行った、といえば会話がつながる。

小松:見られるというリゾート、これも日本人でもありますね。海外だと、例えばレストランなんかで真ん中にその日の一番かっこいい人を置いて、席を作っていくというのがあります。万平ホテルなんかでもそういうのをやります。もっと面白いのはテニスコートで、30 年ぐらい前に若い子がリゾートでテニスするのがはやっていた頃、たくさんテニスコートあってどこのコートが一番人気があるかという、泊まっているところからコートまで遠くない距離で、みんなが通っていく、みんなに見られるところのコートが人気があったのです。せっかく高いウエアを来ているで、それを着て歩く時間と空間が必要だったのでしょう。プレイしているときは、お客さんがそばを通って見られている感覚のほうが気分よくできる、そういうのってありますよね。

十代田: 下手な人でもそう思うでしょう。だから、テニスコートを作るときには、必ず人通りがあるようなところを通ってコートに行けるようにする。ものすごくいいコートだけれども全然人気がないのは、人通りのないところにあるもの。誰にも見られず、落ち着いてプレイできそうなところは案外人気がない。やはり見られるという感覚ですね。

廻: クラブメッドのときも、お客様は見られたいという欲求があると思いました。しかも、昼と夜とは全然別の顔なんです。昼が終わって5時とか6時になるとシャワーを浴び、ヨーロッパ人は必ず靴を履いて、男の人は襟のあるシャツに着替える。フォーマルではないですが、目立つファッションの人が必ずいるので、そのファッションの競い合いみたいなことがあって、見ていると面白い。

梅川: フランス人は、バカンスで友人知人の家に泊まることが多いですが、泊めるほうはウェルカムなのですか。そんな大きな家に住んでいるのですか。夏1ヶ月も滞在されたら困らないのでしょうか。

廻: 一度泊まったら、次回は自分のところに泊めるのです。以前、日本の政策都市銀行にあたる銀行の総裁の家に泊まったことがあり、彼の息子と話をしていたら、親はギリシャの大使だの、企業の社長だのと友達なので、お互いの別荘や実家に呼んだり呼ばれたりして、バカンスを過ごしている。

十代田: いわゆる帰省、要するに田舎から出てきて戻るといふのは違うわけですね？

安島: 「緑の光線」とかでは、誰かが家に帰るときに一緒に着いて行く。

廻: ヨーロッパの人たちは、すぐ自宅に泊まりなさいと言いますね。ホテルになんか泊まるのならうちに泊まりなさいよと。そんなに深い知り合いでもないのに。

安島: 家庭主義だから、けっこう若い子はみんな週末になると家に帰りますから、一緒に友達もついてくる。

廻: よくあるのは家のとりかえっこで、若者は自分のアパートを夏の間とりかえっこします。例えば、夏休みにニューヨークに滞在するため、パリ滞在を望むアメリカ人とアパートを2カ月取り替えるというわけです。何か盗まれたらとか思うのですが、気にしないようです。プチタノウンス(petite annonce)という小さな広告をして、相手を探します。安いですし。

梅川: あれはフランスだけですか？ ドイツもやるのでしょうか？

廻:私はフランスのことしか知らないのでわかりませんが、フランスは、学生はよくやります。

梅川:大学のドミトリーはそうやって使われますね。

安島:北欧も、元々夏の期間が短いからホテルとかが成立しない。だからドミトリーみたいなところを開放してホテルみたいに使う。

梅川:エルダーホステルも、大学のドミトリーを使います。

廻:若い学生はバカンスより旅行に行く人が多い。子どもは親とバカンスに行きますが、大学生はバックパッカーみたいな旅が多いので、そうするとだいたい1ヶ月とか部屋が空くから貸すのです。私は全然知らない子を家に泊めたことがあります。会社の女の子が成田に迎えに行くはずだったのに、旅行に行ってしまったので、その子の知人を自宅に泊めました。泊まる場所がないというので3、4日泊めました。日本人だったらしなかったかもしれませんが、海外からわざわざ来てかわいそうで。逆もあるでしょう。日本人はバカンスに向かないという人が多いけど、実は向くのか、わたしにはわかりません。

梅川:湯治、長期滞在をやらなくなったというのは、やはり工業化社会になったからでしょう。

廻:それから、基本的根本的なところで、レジャーという考え方がない。宗教もない。

関川:そういう国民性なのでは。国も小さいし、最近では鉄道も発達したし。

十代田:いつも思うのですが、ドイツの車と日本の車は、どうして性能が同じなのだろうと。ドイツ人は2ヶ月も休んでバカンスを楽しんでいるのに、日本と同じ性能の車を作るわけです。

関川:どうして日本人って豊かでないのだろうと思います。

梅川:生産性が違うのですね。

廻:生産性が低いです。世界30位ぐらいですから。

十代田:そういう仕組みを日本も変えたら、そのうち生産性が上がるかもしれない。

廻:日本は確かに、だらだら仕事が多いです。

関川: 残業してはいけない、という風潮は最近は結構あるかもしれません。

安島: 冬にドイツに行くと本当にうんざりすると思います。天気は悪いし夜は長いし、食べ物はまずいし。ドイツにはスキー場もあまりない

廻: ドイツにいたら旅行に行くしかありません。

梅川: 日本海側と似たようなものですね。

廻: ドイツの北部は、いいところはあまりありませんね。

梅川: フランスのリゾート地であるラングドックルシオンの最初の頃の建物はあまり見た目が美しくないですが、スペインのほうに行くと新しいタイプの宿泊施設が開発されています。狭いアパート、質の低いアパートメントがたくさんあり、これを新規に開発したというのは信じられません。

廻: 本に書いてあったのは、バカンス慣れしていない庶民が南仏のリゾート地に来ては困るから、あそこに行ってもらおうようにしたと。

梅川: なんであれが豊かなバカンス生活というのでしょうか。全然そうは思えません。昔、大量に販売された別荘地みたいなイメージです。

廻: ラングドックというのは、フランス人にとっては下の下という感じなのです。

安島: かつては、世界のモデルでした。

廻: フランスでは全然評価されなくて、ベトン、つまりただのコンクリと言われていたのです。

梅川: 最初の頃のグランドモットとかは確かにそうですが、スペイン側は低層、二階建てぐらいのアパートメントがたくさん並んでいます。

安島: コンクリートの塊みたいなやつを作ったので、その反省でもう少し郷土建築みたいなものを取り入れて開発をしたと聞きましたが、それはあまり魅力がない。

廻: 庶民をバカにしていますね。この程度の施設でいいだろうと。

安島: いずれにしろ、戦後 1960 年代ぐらいからランディックが開発されたりとか、そのあとスキー場

を開発しました。フランスの高級リゾート地、ニースやモナコは今でも話題に出てきますが、ほかのところは最近話題にならなくなった感じがします。理由のひとつは、海に行って日に焼けること自体に憧れない、日に焼けたら病気になる、がんになる、シミが取れなくなる、そういうことに対して、昔と違って価値を見いださなくなったのではないのでしょうか？ フランス人は今でも日焼けを好むのでしょうか？

梅川:ブルーツーリズムとホワイトツーリズム、それがだめになってきて、グリーンツーリズムに変わってきた、そんなことを言っていますが。

廻:フランス人は海に行くといっても、海で泳ぐだけではないですし、南仏は避寒地ですから。

十代田:フランス人は日焼けをしていました。みんな山に行っても裸になって焼いていますからね。

梅川:パリの街中でも焼いていますね。

廻:セーヌ川のところで焼いている。冬とかほんとに暗くて雨が多いので、日に当たりたくなるのでしょうかね。フランス人には、相変らず夏休みの前のほわんとした感じはやはりあります。夏休み前になるとみんなほわんとしてきて、少し緩んだ感じになる。

梅川:イギリス人は、リゾートの適地を見つけるのがうまい。サンモリッツも彼らが見つけたところですが、ほんとにいいところですよ。よく山の中で見つけたなと思います。山がずっと曇っていても、サンモリッツに上がると太陽が照っている。いいところですよ。

廻:モーパッサンの『初雪』という小説があります。そこに出てくる貴族はノルマンディーに住んでいて、家がすごく寒いのです。主人公の女性はその貴族の奥さんなのですが、体をこわして、カンヌで保養している、もうすぐ死ぬけれど、暖かいところに居られるからいい、というストーリーなのです。南仏のバカンス地はやはり天国なのでしょうね。